

正宗白鳥

志賀直哉と葛西善蔵

志賀直哉と葛西善蔵

一

『荒絹』『老人』『清兵衛せいべえと瓢箪ひょうたん』『赤西蠣太あかにしかきた』『十一

月三日午後の事』『小僧の神様』『矢島柳堂』……志賀

直哉氏のこれらの短い作品を読んで、私は、少し大袈裟な言葉であるが、醇じゆんこ乎として醇なる芸術に接した感じがした。蕪雑な荒っぽい毛むくじやらかな腕をまくって、ゆすり、文句を並べているような文学を、しばしば読まされ

ている今日、私は志賀氏のある作品によって、胸のすがすがしくなる気持がした。強烈なる文学、戦鬪的な文学、濃艶な文学、悲壮な文学。古今の文学はそれぞれ形において存在の価値を保っているのであるが、激しさしつこさを表に現していない、和なごやかな感触を読者に与うる芸術も、尊重していいのである。ことにこの頃は、そういうものがなさ過ぎる。

如上の小説には、淡彩の日本画といったような趣がある。これらに比べると、有島武郎氏の作品は油絵である。志賀氏のような作品は、原稿料を当てに生活している作

家には、とても書けそうでないが、そこに、文学者としての氏の弱点も潜んでいる。世路の経験を経たあとでも、温室育ちのお坊ちゃん気質の跟あとを留めているところがあって、読者に与える感銘において損をしている。氏の初期の作品ではあるが、『網走まで』を取って、葛西善蔵氏の『急行券』という小品に比べて見るといい。共に、汽車のなかで起った小事件であるが、二人の作者の日常生活を反映していて面白い。無論前者の方が、物を見る目も傑れているし、筆の使い振りにうま味もある。しかし、後者の、作者自身に備っている生活苦から染み出て

いる哀歎の影に、前者の遊び気分よりも我々の心は惹かれがちになるのを如何いかにともしがたい。

それで、志賀氏には、「温室育ちのお坊ちゃん」らしい所が、随所に作品に現れていて、時として作品を安っぽくしているが、芸術家としての天分の備っていることは、葛西氏などとはよほど違っている。人間を見る目が冴えていて、頭脳も粗笨そほんでない。

『老人』がいい。『小僧の神様』がいい。二つとも私の好きな作品であったが、今度新たに読み直して、新たに興味を覚えた。芸術の匂いがしているようで、人生味

も豊かだ。こういう作品には、有りがちな感傷語の濫用がない。ユーモアが自おのずから備っていて、わざとらしさが
ない。下品でない。『老人』は、円本の細字で僅か二
ページばかりの小品であるが、ある老人の心境を、簡に
して細かに写している。作者の初期の作品であるが、若
くしてよくこれだけ客観的に印象明晰に書けたと思う。
この小品を一つの問題として、もっと批評を進めよう。
老人にもいろいろある。概括していうと、世上の老人と
いうものは、ここに現されている「ある老人」のように
物分りがよくはない。もっといやらしいものである。も

つとしつこいものである。もつと意地きたないものである。しかし、老人の醜いところを捉えて、面皮を剥がないで、和やかに彼れを取り扱いながら、空疎な描写に堕しないこの小品は、志賀氏の芸術のいい方面をよく代表している。またこういう芸術をも翫賞し愛好し得る興味が、私の心にもあればこそ、この世の生存に堪えられるのである。

十年ほど前に、当時の新進作家菊池寛氏は、『文章世界』に志賀直哉論を寄せていたが、そのうちで、『老人』を推賞して、「こういう題材を自然主義の作家が扱っ

たなら、皮肉の目で老人を見たであろう」と、結末のところなどを例として挙げていたと、私は今も臃^{おぼ}ろげに記憶している。老人が死んで、「かつて老人の坐った座布団には、公然と子供らの父なる若者（老人の妾の密夫）が坐るようになった。その背後の半間の床の間には、羽織袴でキチンと坐った老人の四つ切りの写真が額に入っ

て立っている。……」という結末は、読者を微笑ませもするし、悠々たる人生の影がそこに映っているようにも感ぜられる。しかし、この老人の一生をこう見ないで、この作者の閑却した方面から老人の心に喰い入って、結

末において、人生の破産の影を見せる作風が、菊池氏の思っていたらしく、芸術の邪道であるとは思われない。志賀氏のような境地もいいが、それに安じ過ぎると、世の中があまりお目出た過ぎるようになるのである。

あの頃は、世間一般に自然主義系統の作品に嫌厭けんえんを感じていたためか、微温的な明るみある「白樺」一派の文学が、文壇に地歩を占めた。ことに、志賀氏はあの頃の新進作家の仲間に敬畏されていたようであった。広津和郎氏も、会うたびに、私に向って、志賀直哉讚美の語を放っていた。芥川龍之介氏は、あれほどの才人でありな

がら、志賀氏の前へ出ると頭があがらなかつたということも、この頃聞いた。去年芥川変死の後間もなく、軽井沢に私を訪ねて来た某氏の話によると、志賀氏は、芥川氏の作品をも人となりをも、あまり好まなかつたそうだ。それ故、面と向って芥川氏から敬意を表せられる時には、返答に困つたそうだ。私はその話を聞いた時、「何だ。芥川は志賀なんかに対して引け目を感じる訳はないじゃあないか」と、口に出かかるのを危くおそ压えた。龍之介は直哉の芸術のどういうところに畏服したのであるかと、私はあとでいろいろに考えた。それから、自分を軽視し

ている人の前でその人を讃美することの、いかに頓間とんまであるかをも考えた。……一昨年の一月中であつたと記憶しているが、『新潮』の合評会に私は出席した。その時花袋氏も芥川氏も出席していたが、志賀氏の『鶴』という小品を、花袋氏は特に推賞した。「いい日本絵である」という意味の評語が下されたようだった。私が何とかいって非難すると、芥川氏はその非難を不当とするようなことをいった。今度読んで見ると、この小品は、なるほど、茶室掛けに相応ふさわしい絵である。龍之介は、こういう作物に現れている風韻に傾倒していたのであろうか。

こういう芸術味は、感覚の粗雑になった今日の文壇では味われなくなっている。しかし、「白樺」派の盛時においても、多くの青年読者は、志賀氏の持っていた風韻や雅致を賞味していたのではなくって、むしろ、彼れの作品の中の一つの特色となっていたいわゆる「人道主義」といったような思想感情に共鳴を覚えていたのである。『十一月三日午後の事』という小品の如きが好個の代表作である。

『十一月三日午後の事』が発表された時、その月の雑誌月評を読売新聞でやった和辻哲郎という人は、この小品を極度に賞讃して、この宝玉のような傑作の前では、他の雑誌小説は瓦礫がれきのようだとでも思ったらしく、他のすべてを黙殺したことがあった。文学その他の芸術について、異性に対すると同様に、好きとなると、盲目的に好きになるもので、そこがまた面白いのである。志賀氏のこの小品が、当時迎えられたのは、そこに「人道主

義」「非軍国主義」の感情思想が現れているためであった。田舎道を鴨を買いに行つた主人公が、途上で兵隊の演習の苦勞を見て心を動して、「自分は一人になるとまた興奮して来た。それは余りに明らか過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハツキリしないではない事からだ。何しろ明る過ぎる事だと思つた。すべては全く無知から来ているのだと思つた」と、現今の軍事組織を憤慨して、家へ歸つても、折角買つて来た鴨を殺すことは勿論、自分で食う気もなくなつて、よそへ送つてやつたというのが、この小品の要点である。この小品は、

田舎の秋の街道の光景を叙し、演習の片影を叙し、それに触れそれに離れる主人公の微妙な気持をまつわらせて、味の深い純芸術品をつくり上げている。私は、今度も愛読した。しかし、和辻という人などの感服したような非軍国主義の現れに感心したのではない。軍国主義の非難は、談何ぞ容易ならんやと思う。小説家が秋のそぞろ歩きに二、三の兵士の労苦を見て感傷的感慨を起したくらいで、国家の大事が極められるものではない。

「すべては全く無知から来ている」といっても、実際について深くしらべたら、どちらが無知か分ったものじ

やない。由来詩人芸術家は、あわれみの情に富んでいるので、他の労苦を見るに忍びないのだから、この小品にはその詩人らしい美質が現れていいのであるが、しかし、その思想を實際界に当て嵌めて卓見視するのは幼稚である。

当時の青年批評家が「卓見」視した志賀氏の思想は『山形』という短篇や『和解』という長篇や、その他の小品のなかにも、おりおり微見ほのみえているが、しかし、十年足らずの間に時代の思潮は変って、今日の青年読者や青年批評家には、志賀氏の社会観などは微温的なものとして

冷笑されるようになった。もつと荒っぽく根本的でなければならぬといわれるようになった。しかし、それは志賀氏の作品が価値を失った証拠にはならないので、藝術家たる氏の芸術を味わないで、附属の思想を見るから起ったことなのだ。トルストイを廃物視するのも、粗雑な頭脳をもった一部の現代青年の愚昧な所業であって、トルストイのえらいところは、原始宗教観や無抵抗主義の説教にあるのではなくって、その芸術にあるのだ。今日のプロレタリア文学だって、一知半解の思想や理窟だけで、芸術としての価値を有っていなければ、明日は亡ん

でしまうのである。

『十一月三日午後之事』にしても『小僧の神様』にしても、一幅の人生図として翫味していると、今日見ても、昨日見た時に劣らないほどの味が味わわれるので、十年や二十年で廃物になる訳がない。仮りに、兵隊の演習が廃止される時代が来ても、商店の小僧制度がなくなる時代が来ても、それらの作品の妙味は失われないのである。文学は日常の実用品とは違う。

同じ「白樺」派であっても、有島武郎氏の『生れ出づる悩み』と、志賀氏の『清兵衛と瓢箪』とを比較すると、

この二人の作風が如何に異っているかが分つて、年少の徒の小説学研究の好資料になるのである。どちらも美に對して敏感な貧家の少年を題材としているのだが、武郎は、力を籠めた筆使いでゴテゴテと書いている。直哉は、いかにもアツサリと書いている。油絵と日本画の相違がある。武郎の油絵には、今春上野の博物館に陳列された松方所蔵の英国の前世紀の絵画に見られたような、鈍重さギコチなさがいくらか見られ、直哉の日本画には、昨秋芝の美術倶楽部で、山陽遺墨とともに陳列された竹田の画帖にでも見られそうな含蓄のある筆致が見られる。

私の愛好する志賀氏の作品は、所詮はこういう短篇や小品の範囲に留まるといっていい。作者は「円本」の序詞において、「作者というものから完全に遊離した存在となっている」芸術を渴仰している。芸術の極致はそこにあるのかも知れない。楽屋落ちの興味によって辛うじて存在を保っているような瑣末な身辺雑記小説の如きは、芸術として、下の下なるものかも知れない。そして、氏の小品のうちには、作者から遊離した芸術の趣の俣ばれるものがないでもない。

「遊離」という言葉に、志賀氏はどういう意味を寓し

ているのか知らないが、私は、この言葉の意味を、自我を無視したものとして受け取らない。むしろ自我が完全にその作品に融和し尽したものと思っている。

三

ところで、私は、志賀氏の自伝的小説には、あまり興味を有っていないのである。ある家庭ある社会の事相の記述として、多少の興味が寄せられないことはないが、それは敬意を持った興味ではない。傑れた芸術に対して

の興味ではない。

長篇『大津順吉』の甘さ浅さに、同人雑誌小説みたい
な未熟を感じるばかりでなく、『ある朝』『くげぬま鵜沼行』な
どの短篇にも、ある人の日常雑記以上のものは感じられ
ない。この点では、葛西氏の身边雑記小説のある者はま
だしも読者を動かす力をもっている。そこには自から生
活苦が出ているからだ。

私は、最初雑誌に出た時、非凡な小説のようにいわれ
て、文壇に珍重された、この作者の製作のうちでは長篇
の部に属する『和解』にも、さほど感心しない。無論よ

く書かれているのだ。描写において凡庸の作家の及ぶところでない。しかし、父子の争鬪の根本が、曖昧模糊の感じがする。こういう生活の余裕のある家庭では、お互いの我儘わがままから、こんなことがあるという、客観的態度を、作者があくまで持しているのではなく、作者は、こせこせと主人公たる自己をいじり廻しているので、作柄が小さくなっている。この主人公は、自分に接触した人物の瑣末な一言一行一挙一動を、自分勝手に解釈して、「いい印象を与えられた」だの、「不快だ」のといっているのが、私にはせせこましく思われることがある。志賀氏

は芥川氏のお辞儀の仕様にまで難癖をつけていたと、去年某氏がいつていたが、小説家には有りがちの神経性によろとはいえ、『和解』には、これに類した煩わしさがある。

私は、はじめにこの作者には「温室育ちのお坊ちゃん」風のところがあるといった。しかし、武者小路氏とは、「お坊ちゃん」ぶりが違う。武者氏は、正統のお坊ちゃん、お目出たいところがあるとともに、天空海闊かいかつのところがあり、物に拘らないのびのびしたところもあるが、志賀氏は、その作物によって判断すると、なかなか神

経質で気むずかしくて細かいところによく気がつくのである。家庭の事情にもよるのであるが、生存に対する不満の影も、彼れの心に差している。これで、生活難があつたら、葛西氏よりもこの方が陰気な厭世家になつていたであらうと想像される。

『和解』は、当時この小説を微細に批評して激賞した小宮豊隆氏を泣かせたものらしい。かたくな頑な父子の反目も解けて、父も子も目を濡らし、継母も泣き叔父も泣き、妻も泣き妹も泣くという一篇の結末は、多くの読者をも泣かせたらしい。ところが、私は、こここの場面は、通俗

小説の泣かせ場のような感じがした。志賀氏のような作家にあるまじきところだと思った。『老人』を書いたよ
うな態度で、なぜここを冷静に書き得なかったかと思う。
作者は、自分の事であるためか、自分に甘えて書いてい
るのである。私は、『和解』を通読して、根抵の浅い葛
藤につつかれて来た揚句の果てに、涙攻めになるので愛
想を尽かした。この場面と、『濁った頭』とは、私の読
んだ範囲においては、志賀氏の悪作であると思う。私は、
小説を書きはじめの頃、藤村花袋の両先輩が、ある所で
執筆難を語り合っているのを傍聴したことがあったが、

花袋氏は他人の事を書く困難をいい、藤村氏は、自分の事を書く方が一層困難ではないかといっていた。要するに、どちらも、よく書きこなすことはむつかしいのであるが、龍之介直哉などの作品では、自己の直接実験を直写したものよりも、題材を離れた所から取ったものにおいて一層よく芸術的効果を現している。芥川氏は、死の少し前くらいまでは、自己の露出を嫌っていたらしい。志賀氏は「自分の仕事の上で父に私怨を晴すようなことはしたくないと考えていた。それは父にも気の毒だし、なおそれ以上に自分の仕事けががそれで穢けがされるのが恐しか

った」といつているような遠慮をもっていた。

しかし、『和解』には私の心の捉えられたところがあった。ことに赤児の病気と死亡のあたりは真に迫っている。しかも主人公の心は混乱していながら、描写は客観性を持して乱れていない。私はここを読んでから間もなく葛西氏の『不良児』を読んで、子供のために苦勞する親心を想像した。私には体験のないことであるが、葛西と志賀のような、他の題材はややもすると遊び気分を作中に現している人達の芸術にも、子供の生死の危機、運命の岐路に立つと、極度の緊張を示しているのに感動した。

四

文壇に割拠しているいろいろな団体のうちで「白樺」派といわれている仲間は、私に取っては最も縁の遠いもののようにかねて思われていた。志賀直哉氏の如きは顔も見たことがない。葛西善蔵氏は早稲田に学んだ縁故で、文壇で「早稲田派」といわれる系統に属する作家であったが、私はこの人とも殆んど面識がなかった。ただ一度、徳田秋声氏夫人の葬式の時に、寺院の庭で会っただけで

ある。で、私は、個人的に葛西氏をよく知らなかったの
みならず、氏の作品にもあまり親しんでいなかった。

『子をつれて』という短篇を、『早稲田文学』で読ん
だ時、この作者の名をはじめて知った。そして、貧窮の
生活を叙しているうちに瓢逸ひょういつなところのあるこの小説
を面白いと思った。それから、『贗物にせものさげて』という小
説を、やはり『早稲田文学』で読んで、よくある材料だ
が、こういう題材を取った小説では、近松秋江氏の『伊
年の屏風』の方が面白いと思った。その後、二、三葛西
氏のものを読んだはずだが、私には興味がなかった。

ある時、文学志望の青年が来訪した時の話に、彼れは葛西氏の作品に最も敬服しているといつて、「あの人はどうして自殺しないのでしようか」といつた。突き詰めた生活をしているこの作者に取つては、自殺が当然の運命である、この青年は思つてゐるらしかつた。またそういう運命にある人間を、凡人とちがつたえらい人間であるように思つてゐるらしかつた。私はこういう見解には同感しなかつたが、葛西氏に心酔する青年もあるのかと、むしろ不思議に思つてゐた。

今、「葛西善蔵全集」を披ひらいて、幾つかの短篇を続け

て読んで、私はウンザリした。「暗曇、孤独、貧乏」の生活記録の繰り返しであって、それが外形的にも思想的にも単調を極めている。「私の一番悲しく思うことは、貧乏であること、そしてその貧乏に打克^{うちか}ってグングン金持になって行けるほどの豊富な創作力を恵まれていないということである」と、自分で反省しているが、その通りであって、氏の創作力の貧しさに、私は驚いた。とにかく四十余歳までの生涯を文学に托して、呻吟苦悩、こういう作品をこれだけしか書き上げられなかったのは悲惨に感ぜられる。これだけのものも、貧乏の鞭が彼れを

追い立てたればこそ書けたのである。改造社などの雑誌社が彼れをせき立てて書かせたればこそ、幾つかの身边小説も辛うじて出来たのらしい。世が彼れの天才を虐待したのではなくって、貧苦の運命は彼れの身に具っていたのであった。

しかし、それに関らず、「葛西全集」は、現代の日本の文壇に存在を価いする資格は有っているのである。才気に乏しいかわりに彼れは自己の芸術に誠実であった。当て気や通俗味は薬にしたくもなかった。世俗にいわゆる成功の資格たる「運、鈍、根」のうち、彼れは「鈍」

は充分に持っていたが、「運」と「根」とがなかった。しかし、飲んだくれに有りがちの、瓢逸さ、多少身に帯びていた仙骨が、彼れの暗影鈍昧な作品に、芸術の光を差させているのである。

「私は、妻子を棄てて、あの鬼のような継母の迫害に堪えかねて、郷里を飛出して来た。それ以来、私はすべての女性というものに対して脅迫と敵意を感じている。どんな女に対しても、私は私の継母というものを通さずには、考えることが出来ないのだ。私は自分の妻や娘たちのことすら、信じたく思わない。すべての女性の蔭に

は、私の継母の邪鬼のような影がひそんでいる」（『暗い部屋にて』）と、彼れはいつているが、しかし、その作品には、そういう態度を持った観察に基く女性は、一人も半分も現れていないようである。「彼らはすべて邪悪で、毒婦で、涙にも媚こびにも、すべて死の毒を含んでいるのだ」と、どうしたはずみか、興奮して毒吐いているに關らず、そんな女性を一度も具体的に書いていない。そんな女性もこんな女性も、女というものを小説のなかにまるで書いていないのは珍しい。主人公の妻とかおせいとか、温泉場の芸者とかで、作中に出てはいるのだが、

女の名前でそこへ坐っているに留まっつて、外形において女の容姿を備えてそこに現れているのでもなければ、一人の女としての心理の動揺がそこに見られるのでもない。『急行券』のなかに、主人公の妻が、ちよつと見づかりにくいところへ、夫の小使銭を入れて夫に渡している女らしい心使いを、私はこの作者の作中では珍しいと、思うくらいである。あれほど主人公と関係が深く、あちらこちらの作中に現れているおせいだつて、少しもいきいきして描かれていない。この女の心理なんかを、作者は歪みなりにも観察していない。「いつも相手を疑わな

い「薄ぼんやりの女として、作者は見ていたのかも知れないが、そういう平凡な女としても明晰に描かれていない。

やくざな書画を売って大金をせしめようとした『贗物』と同じ心理を取り扱っている『馬糞石』は、葛西氏の傑作で、田舎者の無知な慾心が、無器用なうちにも一種の味いのある筆でうつされている。村のスケッチである『仲間人』もいい。しかし遺憾にもこういう田舎の世相を写した小説も、そう多くはないのだ。一人の異性をも描き得なかつた彼れは、自己を離れた世態人情をも、描き得な

かった。彼れは、ただ狭小な範囲でころがっていたのだ。

私は、私の読んだ彼れの数十篇の短篇のうちで『仲間』というのが、最も彼れの面目を知るに都合のいい代表作であると思っっている。これは割合に自由に書けている。世才にも文才にも貧しい、しかも、肉体に病氣をも有っている彼れが、差し迫った金の工面をしに上京して、運のいい友人達が面白そうな生活をしているのを見て、心を暗くすること、友人達に揶揄されること、金策は不成功に終って病氣の悪くなること。……みじめなことの連続なのだが、そこに、独得の諧謔味がにじみ出ているの

で、自から一つの芸術境をつくっている。

「狸」という綽名あだなを仲間からつけられたことを気にして、「哀しき狸……」と、泣きたいような自嘲の気持で
呟き、「若い彼らの眼には、自分のような人間は、よほど滑稽に見えるに違いない。老いぼれの道化者として彼らには見えないのだろう。ほんとに泣いている自分の心持は、全盛揃いの彼らに理解されようはずがない」と歎じている。

しまいの方で、全盛でない方の友人を訪ねて、自棄やけの戯談じょうだんをお互いに取りかわしたりしているあたりからが

面白い。細君に逃げられたその友人と、急を要する金の工夫のつかない上に、九度近い熱の出ている彼れとは、喰い散らした佃煮などを肴に、金持、才能、名誉、美、芸術、健康、女性——そういったすべてのものに口から出任せの罵倒を浴びせて痛快を叫んだ。あらゆる者に向つての罵倒のはてが、今度は二人の間の罵倒となるのが面白い。不平不満、胸のもだえの極は、互いに他を罵つただけでは収まりがつかないで、面と向つた二人が互いにぶつつかり合いでもしなければ、どうにもならなくなるのだ。

「貴様は臆病者だぞ、卑怯者だぞ、巷に出ろ」と、だしぬけに友人が、主人公たる「彼れ」を叱咤する。

「そういうなよ。おれは病氣じゃないか。」

「だからなお出るんだ。貴様の寿命なんか後幾ら持つものだ。おれについて来い。おれは原稿なぞ書いてやしないさ。糞骨折って、猶太人ユダヤみたいな人間共に頭をさげて持廻るなんか真平御免だよ。……われは民衆に赴かん。……」

昂然と行って、やがて、

「K来い。角力すもうを取るから来い。」

「駄目だつていうに、そんなことしたらおれは死ぬじやないか。」

「死んだつて構わない。生きとつたつて何になるか。さあ来い。」

「貴様は若い細君に遁げられたんで、おれに角力を挑む気なんだな。……よし、貴様なんかに敗けてたまるか。」
理由のない取組み合いがはじまった。

「貴様はおれを殺す気か。……参ったから放せ。」

「放さん。貴様ののような病弱者はいつまで経つたつて放さんぞ。」

「そんな乱暴なこといわんで放してくれよ。苦しい。苦しい。おれはまた血が出るよ。許してくれ。……君許してくれよ。」

主人公は半ば泣き声になつて、依然友人の咽喉を攻めながらいった。

虐げられたる人の一生といった感じが、読後に油然ゆうぜんとして起つて来る。「虐げられた」といつても、それは、天才が衆愚に認められないで侮辱されているという意味ではなくつて、才能の乏しい人間が藻搔もがいている苦しさが、傍人に侮蔑の目で見られることを私は意味している。

「半ば泣声になって依然友人の咽喉を攻めて」いるのは、自から葛西善蔵の一生を表象した言葉である。力乏しくして書けないのに苦しみながら、なお相手（芸術）の喉から手を離さないで闘っているのである。

五

「女性はすべて邪悪で、涙にも媚びにも、すべて死の毒を含んでいる」という女性観を真に痛感していたのならば、自分の鬱憤を晴らすためにも、小説の好材料として

も、数十年の作家生活の間に、それをこそ力を入れて書くべきはずなのに、そういった女性の片影をさえ書こうとした形跡もないのは、不思議である。作者は果してそんな女性観を持っていたかどうか疑われるくらいである。たまに、彼れの筆から出て来る女は、「死の毒を含んでいる」どころか、凡庸なお人よしである。そして、彼れの周囲の男性にしても、どちらかというと、人がいいのである。彼れの老父は、わが子と一しよに酒を飲んで、わが子に唄わせたり踊らせたりして悦しがる人間である。たびたび作中に出て来る彼れの弟は、貧しいなが

らも、心力を尽して、兄の世話をしている。志賀氏の身辺雑記風の小説のなかの人物の親しみが形式的に見えるのと異っている。愚鈍の善良さが彼れの作中の人物にはよく現れている。比喻が提灯ちようちんと釣鐘になるが、彼れの文学的面差しはドストエフスキーに少しは似ているのであろうか。それが彼の創作上の総財産である。

『暗い部屋にて』は、彼れが力をつくしているいろいろな人間を書いたものだが、どうも抽象的で客観性に乏しい。『湖畔手記』は、彼れの晩年の作品であるが、鈍重な筆にも錆さびを帯びている。心境と筆致とぴったり合ったいい

作品である。『春』や『雨』や『歳晚』は彼れの詩である。『寺の梅も堅いながらに最早つぼみ蕾を揃え、枯れ朽ちたとしか見えない牡丹の枝にも瑪瑙めのうの牙のような芽を見せて、年を送り春を迎える用意が出来ているが、自分自身を顧みて見ると、北嶺に寒い姿ばかりで、南枝に香しい梅の面影といったようなものは、どこにも望まれなかった』と歎ずるなんか、文学者通有の感傷語で、私などは聞き飽きているのであるが、小説に現れているような葛西氏も、独居静座の折には、自然と自己を対照して、こういう月並の感想に耽ったのかと思うと、新たななる興

味が覚えられる。

（志賀氏の『暗夜行路』は、前篇だけはかつて通読して、読後感を述べたことがあった。）

（八月二十五日、軽井沢にて）

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館